

## トーンハレの シーズン閉幕コンサート

スイス連邦は州ごとに夏休みをずらし、ヴァカンス渋滞を緩和させる政策を取っているため、6月末には「夏休みへの助走」が始まる。チューリヒの音楽界では、真つ先にチューリヒ・トーンハレ管弦楽団が、6月26日から3日間続いたエンディング・コンサートで、2018/19シーズンに別れを告げた。

まず、暑さと夏休み前で浮き足立つ世間とは無縁のような、ヘルベルト・プロムシユテットの落ち着いた統率力に脱帽した。何一つ特別な動きはしないのに、オーケストラの音が、古き良き時代を彷彿とさせる豊かな響きを取り戻す。「ドイツ音楽の生き字引」が創り上げたオール・ブラームス・プログラムは、まさしく「ロマン派」な音色で、年月を経て熟成した赤ワインのようだ。アーティスト・イン・レジデンスのジャンニス・ヤンセンは、「ヴァイオリン協奏曲」のなかに男性的な炎と女性的な細い叙情性を散りばめ、92歳のプロムシユテットの神がかりですらある音楽に、両性具有的の若さを加えて、大鳴采を浴びていた。

休憩後の「交響曲第3番」も、トーンハレ修復中の仮住まいであるMAGホールとは思えない豊かな音があがっていった。深い音色が美しく、思わずほほえみがあふれる。有名な第3楽章も太いレガートでグイグイ引く張るのではなく、優しく、輝いたダイナミクが寄せては返す波のよう。ホルンのソロも素晴らしく、終演後も心が撫でられたような気持ちで、思わずメロディを口ずさみながら、柔らかな幸福感に包まれて家路についた。

## アルゲリッチとタンゴ

シーズンが終わって貸ホールとなったトーンハレMAGで、7月10日の「マルタ・アルゲリッチ&レオンクエントロス・クラシックとタンゴ」を聴いた。プエノスアイレスのアルゲリッチ音楽祭など、イヴェント創始者としても知られるエドゥアルド・フーベルトとアルゲリッチが、ドビュッシー「牧神の午後への前奏曲」を2台のピアノで演奏すると、フランスの匂いがホールを満たした。2曲目に、フーベルトが立ち上げたアンサンブル、レオンクエントロスのヴァイオリニスト、アントン・マルティノフとチェリストのホルヘ・ボッソがアルゲリッチと組んで、メンデルズゾーン「ピアノ三重奏曲第2番」を奏でると、ドラマティックな濃い音色でドイツの風景へと一変する。第1楽章後に拍手が来てしまうほど雄弁に始まったのだが、その後が尻窄みになってしまった。弦楽器の二人はソロ・パートが問題だ。ヴァイオリンは硬質な音で自己主張するのだが、音楽的オーラがなく、チェロは反対に音楽的なのだが、音色がくすんで押し出しがない。ファイナーではアルゲリッチがスバートをかけてようやく盛り上がった。

タンゴ部門は、前出の3人プラス、アルゲリッチの娘リディア・チェンのヴァイオラ、ヨナス・ヴィレガスのコントラバス、バンドネオンのマルセロ・ニシマン・レオンクエントロスが勢ぞろいして、ヒナステラ「パンベアーナ第2番」で始まるはずだったが、4日前に他界した「ボサノヴァの神」ジョアン・ジルベルトに追悼の念を込めて、故人の「神秘的な六重奏曲」に替わった。

続いてフーベルトが2台のピアノのために編曲したピアソラ「忘却」と「リベルタンゴ」で、前者はフーベルトがアルゼンチン・タンゴ独特の「泣き」を入れ、後者はアルゲリッチのパワーが炸裂し、今宵のクライマックスとなった。その後ニシマン自作の「オンブレ・タンゴ」が現代曲のように響き、フーベルト「マルトゥランゴ」でサテイツっぽい部分もあるクラシカルなタンゴを聴かせ、「タンゴ・スエヴォ」の継続を主張したが、ピアソラの後継者には及ばないと知らしめる結果に終わった。最後はアルゲリッチも加えた全員でピアソラ「現実との3分間」を、アンコールでも演奏し、観客を総立ちにさせた。

## ムジークコレギウム・ウィンター トウアーのオープン・ガラ

のトーマス・ツエートマイアーは曲順を逆にし、ドヴォルジャーク「交響曲第9番新世界より」でコンサートを始めたのは正解だった。屋外のためか、オーケストラ全体のタイミングが合うまでに、同曲の第3楽章までを要したからだ。音響も改良の余地があるが、それでもコンサートマスターとクラリネットの音色は美しかった。しかし休憩後にカティア・プニアティシヴィリが登場すると、そんなことはすべて忘れてしまった。スリル満点で燃えるような第1楽章、拡声していることを忘れさせる美しく柔らかな第2楽章、聴いているだけで頬が緩むほど盛り上がった第3楽章は、花火のように終わった。アンコールを勧める指揮者を制したプニアティシヴィリだが、聴衆に恒例の投げキッスを贈り、バック・ステージでもご機嫌な様子だった。

昨年に続く来日公演が、10月28日にトッパンホールで予定されているムジークコレギウム・ウィンタートウアーの最近の躍進は顕著だ。意欲的に一流ソリストを呼び、「チューリヒのベツトダウン」に甘んじない勢いが感じられる。そんな彼らの屋外ガラコンサートを開演ギリギリ数時間前に雨が止んだ7月6日に聴いた。ソリストの希望でラフマニノフ「ピアノ協奏曲第3番」から、チャイコフスキ「同第1番」に替わったため、首席指揮者



プニアティシヴィリの登場で盛り上がったムジークコレギウム・ウィンタートウアーの野外ガラ・コンサートから ©musikollegiumwinterthur